

奥能登国際芸術祭2023

会期 2023年9月23日(土) - 11月12日(日) 51日間  
会場 奥能登県市会館 247.20㎡

主催 奥能登国際芸術祭実行委員会  
共催 奥能登県市会館  
協賛 奥能登県市会館  
後援 奥能登県市会館  
協賛 奥能登県市会館



## 「表現未満、」の旅は続いている

久保田翠（クリエイティブサポートレッツ代表）

### 表現未満、

「表現未満、」とは、アートが特別な人の特別な行為ではなく、普通の市民一人一人にある自分を表す力、振る舞いを「とるに足らない」と一方的に判断しないで、その人固有の「表現」と捉え、この行為こそが文化創造の軸であるという考え方である。同時に「その人」の存在を丸ごと認めることを目標としており、人権や尊厳の回復にもつながっていく。

この事業は2016年より始まった。はじまりのきっかけは、2020年のオリンピック・パラリンピックの文化プログラムの一環としてレッツの中から起草された。

レッツが継続してきたアート活動は作品作りを主体としていない。作品をつくらなく決めていくわけではなく、たまたまそうした利用者が来なかった。そしていわゆる「問題行動」という行為をし続ける人が多く通っている。しかし、その問題行動と言われるものの正体は実は非常に面白い。誰にとって問題なのか？判然としない。むしろひたすらやりたいことをやり続ける彼らに神々しささえ感じる私たちは、彼らがやりたいことが思いっきりできる環境を整えた。そして2016年からそれらをもとにしながらさらに表現の可能性を拡張していく事業として「表現未満、プロジェクト」を立ち上げた。

「表現未満、」は障害者の表現を示しているのではない。多様な人のすべての行為を「表現」としてとらえなおすことを推奨している。そしてその「表現」に優越をつけない。どんなに有名なアーティストが作るものでも、子どもが一生懸命描いた絵も表現は表現だ。そこをフラットにしている。あなたはそのままそこにいていい。存在の肯定、そして人間讃歌。「表現未満、」にはそうした意味がある。

そして2017年度の文化庁の芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。

その会場に私はくばたけしを連れて行った。以下、その時の新人賞を代表してのスピーチから引用する。

#### < 2017年度芸術選奨文部科学大臣新人賞代表スピーチより >

そこにかにも場違いな人がいます。彼は私の息子でくばたけしと申します。現在22歳です。重度の知的障害者で、今でも、食事も、身の自立も、排泄も自分でできない人です。

今も入れ物に鍵を入れて打ち鳴らしていますが、これを彼は2歳頃から、今まで1日も欠かすことなく、ほぼ寝る時間以外にくり返し行っている行為です。非常に音もうるさく、ご来場の皆さまも、なぜこの様な晴れがましい席に、こうした人がいるのだとお思いの方も少なくないと思います。少しだけ皆さまのお時間をいただきたいと思います。

彼のこの行為は、学校や公共空間では「問題行動」ととらえられることが多いです。しかし、障害があろうがなかろうが、人が毎日熱心に取り組んでいることを、そんなに簡単に「問題行動」として切り捨ててしまってよいのだろうか、と私は思っていました。この行為は、視点をかえれば、彼が最も熱心に行っている、彼の人格を現している、彼を表現している行為だとも捉えることができるからです。

私の運営している障害福祉施設アルス・ノヴァは、こうした、本人が大切にしていることを、とるに足らないことと一方的に判断しないで、この行為こそが文化創造の軸であると考えています。また、できる／できないといった能力で判断するのではなく、その人がいることを、その人の表現をふくめ、全肯定することから始めると、今の日本の社会の価値観やルールが果たして本当に正しいのだろうか、幸せにつながるのだろうかという問いかけにつながってゆきます。

今回受賞しました表現未満、とは、特別な力がある人が作る特別な行為ではなく、誰もがもちえる、自分を表す方法としての表現を大切にしていこうとするプロジェクトです。今の世の中は分断や隔絶、孤立といった難しい課題を抱えています。だれもが生きづらさを感じている、そんな時代です。しかし、苦しい状況を変えることは容易ではありません。しかしそれでも人は生き延びていかなければならない。その時に必要なのは、自分たちのこと、辛いことを笑いに変える、楽しいことに変える、そういった視点を変える力です。そういう力がアートにあると思っています。

当時、私たち家族は非常に苦しい状況にあった。たけしの介護が限界を迎え、夫が倒れ、にっちもさっちもいかない。たけしを預かってくれるところはない。さてどうするか。その中の受賞だった。そしてこの直後に「たけし文化センター連尺町」が始まる。

## たけし文化センター連尺町

### < 2018 年度「表現未満、プロジェクト」報告書より >

2018年11月1日、たけし文化センター連尺町が浜松市中心市街地にオープンした。

ここは、障害のある人の障害福祉施設（アルス・ノヴァ）でありながら、地域の文化創造発信拠点を目指している。どういうことかと言えば、重度の知的障害者の人たちの活動場所をあえて浜松市の中心市街地に作り、彼らがこもって作業をするのではなく、とにかく街に出かける、遊びに行く、時には小さな問題も起こしながら積極的に街、社会を揺さぶっていかうとしている。

10mほどの道を20分も30分もかけて歩く人がある。ほとんど動かない時もあれば、何かをじーと見つめていることもある。それはある意味「奇異」な行動である。しかし、これが彼の散歩の仕方、道の歩き方なのだ。それを「O君の散歩ワークショップ」としてお客さんを集めて実施する。参加者は「こんなに道をゆっくり歩いたことはなかった。」と感動する。

車の行き交う音が好きな人がある。片手にポータブルのピアノ楽器をもって一日中外にいてピアノ楽器から音を出しながら街の音を聞いている。ポータブルの楽器に集中しているから時に人とぶつかったり、止まったり、動かなくなったりする。そのたびスタッフもハラハラ。そこでS君に「街の音鑑賞中」と書いた蛍光ベストをつけてもらう。そして街を歩き回る。蛍光ベストだけでわけのわからない行動ではなくなる。

大きな布をずるずるとひきずって歩く人がある。ときどきそれをふわっと広げて体に巻き付けたり、いざったり飛び跳ねたり。道でやっていると怪訝な顔で人々が通り過ぎていく。少し広めの歩道でK君はいつもの通り、フワッと布を巻き付けている。そこにカメラで彼の姿を撮るスタッフが同行する。ただの迷惑行為にしか見えない彼の布と歩きは、「撮る人」の登場でパフォーマンスのように見えてくる。

重度の知的障害者に会ったことがある人は本当に少ない。それだけ彼らは街に出てきていないし、公共空間にも行っていない。しかし彼らは確実に私たちの社会に居るのだ。貴方が会ったことがないだけで。

私は彼らが「表現者」だとは思っていない。彼らの障害を表現だとして、いろいろな人に見てほしいわけではない。私は彼らの存在を社会に顕在化したいのだ。彼らが私たちと同じ時代の同じ街に居ることを知っ

てほしい。そして彼らの佇まいや行為、一つ一つが私たちの常識とは違うこともあるが、それは「奇異」ではなく、その人の人格を表す「表現みたいなもの」つまり「存在」である。

「表現未満、」とは、特別な人がつくる「表現」ではなく、だれもが持つ自分を表す力、行為を「表現未満、」と評して大切にしていこうとする文化活動だ。とるに足らない、無駄、役に立たないと切り捨てるのではなく、その人を表す尊い行為としてリスペクトする。そうすることで、人と人との関係は豊かになり、そこから文化が生まれていく。障害のある人ばかりではない。あらゆる人にこれは共通する。「あなたがそこに居る」のだ。

こうしたことを一堂に会する「表現未満、文化祭」を2019年2月に開催した。オープンして3か月のたけし文化センター連尺町で我々が考える「表現未満、」の片りんを街に少しだけご披露した。私たちはここで毎日活動している。今日も誰かが街に出かけている。私たちは街にどうかかわっていきけるのだろうか。そして、日常というのは何度でもトライ&エラーを繰り返すことができる。やって、失敗もして、またやって・・・新しい文化はこうして生まれるのかもしれない。

たけし文化センター連尺町は、重度知的障害者の施設でありながら中心市街地の文化創造発信拠点を目指している。重度知的障害者の活動場所でありながら様々な文化事業を発信していく。「雑多な音楽の祭典〜スタ☆タン!!」「タイムトラベル100時間ツアー」「GOGO!たけぶん探検隊!」「かしたたけし」「クラブ・アルス」「かたりのヴァ」「のヴァてれび」と様々なコンテンツが生まれている。

そして3階には重度障害者でも泊まれるシェアハウスとゲストハウスがある。現在ここに3名の重度障害者が生活している。そして年間200名〜300名の一般宿泊者や滞在者がいる。「活動」だけではなく「生活」が始まった。そしてより地域、街を意識し始める。

## 「生きること」と「アート」

### < 2019 年度「表現未満、プロジェクト」報告書より >

分断を超え新しい価値観を創造していく「表現未満、」プロジェクト  
「表現未満、」とは、アートが特別な人の特別な行為ではなく、普通

の市民一人一人にある自分を表す力、振る舞いを「とるに足らない」と一方的に判断しないで、その人固有の「表現」と捉え、この行為こそが文化創造の軸であるという考え方である。同時に「その人」の存在を丸ごと認めることを目標としており、人権や尊厳の回復にもつながっていく。

2016年から行った「表現未満、プロジェクト」のその社会的な背景を見てみると、この4年間に全国で文化プログラムが盛んにおこなわれるようになった。特に障害者の文化・芸術活動は、障害者団体が取り組んでいた時代に比べて、一般の文化施設や文化団体が取り扱う事業が圧倒的に増加した。それは東京オリンピック・パラリンピックが「共生」をテーマとしていることが大きく影響している。

一方で、2019年に行われたあいちトリエンナーレにおける「表現の不自由展」に見る一連の様相は、日本において文化・芸術の地位の低さを露呈した。同時に、文化・芸術が作品づくりやイベントづくりとしての意味だけではなく、人々の生活や人権、尊厳といった「生きること」にも直結した営みであるということは多くの国民にまだまだ認知されていないことも物語っている。

レッツが障害福祉施設を運営しながら文化事業を行っているその大きな理由は、まさに2つは切り離せないものだからである。重度知的障害者が多く通うこの場所は、障害福祉事業として彼らの生活や活動を支えている。福祉事業は障害者の「衣・食・住」といった基本的な生活を支える事業である。しかし人はそれだけでは幸せを享受できない。憲法でも保障されているように「健康で文化的な生活」を作り上げるためには文化事業が必要なのである。

レッツの活動はこの文化活動を作品づくりやイベントとは位置づけていない。彼ら自身が社会に認められ、自由に活動できる環境を作っていくために文化・芸術活動がある。たけし文化センター連尺町が、わざわざ浜松市の中心市街地に重度知的障害者の活動場所を作り、ここを一般に開き、「雑多な音楽の祭典〜スタ☆タン!! 3」、「タイムトラベル100時間ツアー」、文化祭、「かたりのヴぁ」、「玄関ライブ」などを発信し続ける意味は、普通の人々との交流（ボランティアではなく）を促すためだ。それは彼ら障害者にとっても今まで接したことのない人々との出会いや、体験の機会である。これは「障害者」というレッテルを超えて一個人として社会と初めてつながることが可能となる。まさに「文化的な生活」のための入り口なのである。同時に、今年度行った『小松理虔さん表現未満、の旅』、WEB配信、「のヴぁてれび」といった発信事業は、

まだこうした活動を知らない一般の人たちがあらたな世界を知る機会でもある。特に小松理虔さんのわかりやすいかたり口を通して、「表現未満、」を掘り下げ、自分事として考える道筋を示している。

共生社会とは、新しい価値観と出会うことである。これは様々な固定概念を疑い、そこから解放され、「ともに生きる」ことを思考し始めることである。少子高齢化、格差の拡大などの社会的な課題とともに人々のつながりは希薄化し多くの人々が孤立する社会のなかで、地域共生社会の実現はますます緊急の課題である。「表現未満、プロジェクト」は、個々の価値観や人権に対する考え方を革新しながら、ともに生きることを伝えていく事業である。次年度以降はより生活や暮らしに踏み込んで、「文化的生活」を考えていきたいと考えている。

そして2020年には『ただそこにいる人たち』が発行された。これは地域活動家兼作家である小松理虔氏が毎月1回レッツに滞在しながら「表現未満、」について思考する紀行文をまとめたものである。ちょうどコロナ禍に出版され、レッツや「表現未満、」の理解を促すバイブルのような本が出来上がった。

## 『ただ、そこにいる人たち』

### <『ただ、そこにいる人たち』より>

今年、小松理虔さんと旅をしました

レッツのホームページに「表現未満、」というバナーがある。そこを開いていただくと「小松理虔さんの表現未満、の旅」というカテゴリがある。2019年度はほぼ1年間、毎月1回、レッツに滞在しながら紀行記をお願いした。

そもそも何で小松理虔さんかといえば、それはやはり小松さんが著した『新復興論』だった（2018年の大佛次郎論壇賞受賞）。

私は小松理虔さんの『新復興論』を読んだ。特に第3章は、アートプロジェクトのことが記してあった。私は今までにこんなにわかりやすく、平易な言葉づかいでアートプロジェクトを語る文章を読んだことがない。なぜいわき市でアートプロジェクトが始まったか、それが何を残していったのか、市民（そして小松さん）をどう変えたのか、原発とアート

と市民活動の一見、つながらそうな文脈が小松さんの分析力で見事に語られていた。アートが地域に人に及ぼす力を、とても分かりやすくしかし明快に語り上げていた。この人が「表現未満、」を考察したらどんな文章が生まれるのだろうか。きっと私たちとは全く違った角度から「表現未満、」を語ってくれるのではないか。そしてそれはまさに的中した。

「表現未満、」とは、だれもが持っている自分を現す方法や本人が大切にしていることを、取るに足らないと一方的に判断しないで、この行為こそが文化創造の軸であるという考え方だ。その表現に優劣をつけたり、作品と位置付けることもしないで、ただ、ただ「その人の表現」として尊重する（つまり無視しない）。これは、だれもが認められる、尊重されることと同じで、尊厳や人権にもつながっていくと考えている。

しかしこれはなかなか説明が難しい。これを小松さんがレッツの利用者さんとのエピソード、時には家族の関係、福島のことにも思いをはせながら言葉を編み出してくれた。

「表現未満、」的な人は社会に多くいる。そして表現なのか表現でないのかもわからない、でもその人を改めて見直す機会として「表現未満、」はある。

いままで全く理解できなかったあの人の行為を違った方向から眺める。それによってその人を少しおもしろがってみることができる。つまり「あなたがありのままにそこにいるといい」と承認する人権回復みたいなものなのである。

しかし、「表現未満、」は何かを明確に指し示したりはしていない。なんとなく、ふわっとしている。しかし実は「表現」に対してのアンチテーゼでもあり批評でもある。いわゆる巷で言われている表現とは一線を画して新しい文化を切り開けるかも！といった挑戦でもある。

本書の中で、小松さんが作り出した「共事者」という言葉がたびたび登場する。私はことさらこの言葉が気に入っている。

当事者でもなく、福祉の専門家でもなく、「よそ者」の立ち場をキープしながら面白い人。

福祉というのはとかく真面目になりやすい。それは人の生き死や、暮らしや生活に関わることであるがゆえにどうしても深刻になりがちだ。親子の関係もそうだ。家族という関係は煮詰まる。愛情があるだけに過剰に反応したり怒ったり許せなかったりもする。どうにもこうにも厄介なものだ。その煮詰まった関係性をとりあえず、ふわっとさせてくれる

「他者」が必要だとは何となく思っただけ。しかし何かが違う。

小松さんから「共事者」という言葉を聞いたときに「そうそう！」と心の中で妙に腑に落ちた。そうだ「共事者」だ。

きっと今後小松さんは共事者について詳しく語る本を書くであろう。それは同時に、今の社会のいろいろなところでこの「共事者」を必要としているから。

そしてこの言葉が見いだされた背景の1つに「表現未満、」があるといい。

2019年の終わりから2022年にかけて世界中でコロナ禍が席卷した。コロナ禍は多くの人の「しあわせの価値観」に大きな変化をもたらした。それと合わせて日本でもWell-beingという言葉がよく聞かれるようになった。経済や個人の欲望ではどうにもならない「しあわせ」を多くの人が探し始める。そんな時代が到来した。

コロナ禍でもレッツは1日も休まず営業を続けた。2020年に「ちまた会議」が生まれた。ちまた会議は街のステークホルダーの皆さんとこれからの街を考えるプラットフォームだ。

コロナ禍の打撃の中で死んだようになってしまった中心街。今こそアートの何かできないかと考えた。そして2021年、思い切って20年間空き地となっている広大な松菱百貨店跡地を全部使ったアートイベント「オンライン・クロスロード」を実施した。「松菱跡地が開いた！」と大きな反響があった。コロナ禍の網目を縫って4日間行われたイベントは5000人の集客があった。

同時に「まちづくりを考えたら福祉にたどりついた」と銘打った事業を展開。「福祉によるネイバーフッドシティ構想」が誕生した。

## 福祉によるネイバーフッドシティ構想

< 2021年「まちづくりを考えたら福祉にたどりついた」タブロイド版より >

街はだれのもの？ ～人がいるから街になる～

私は現在、浜松市中心市街地から6kmほど離れた郊外に住んでいる。住んでいる地域は、自然環境に恵まれ、庭や家も比較的大きい。20

年前、私と夫、2人の子ども（長男は重度の知的障害者）、そして猫2匹と大型犬1匹がのびのびと生活したいと思い、中古住宅を購入した。

長女が小学生の頃までは地域とのつながりがあった。それは子どもを通じてのつながりで、子供会の役員をやったこともある。しかし、娘が中学に入ると、地域とのつながりはあまりなくなった。長男は重度知的障害があり、地域の学校ではなく、家から20kmほど離れた特別支援学校に通っていた。私はすでにクリエイティブサポートレッツを立ち上げていたので、子どもの世話と仕事に費やす時間が多くなり、自然と地域との縁は薄くなっていった。

その頃からか、犬のことや猫のことで、ご近所とトラブルになることが増えていった。また障害のある子どもの音や振る舞いで注意をうけることも多くなった。そして、私たち家族は、あまり地域を出歩かなくなっていった。

私は今、夫が亡くなり、子どもも自立しはじめ、この広い家に一人で生活している。

一方で、重度知的障害のある長男「たけし」は、中心市街地にある「たけし文化センター連尺町」の中にあるシェアハウスで、ヘルパーさんの支援を受けながら生活している。日中も、同センターにある障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」に通っている。たけしは毎日街を闊歩し、買い物をし、雑貨屋やゲームセンターに遊びに行き、時にはライブハウスにヘルパーさんと行くなど、20代の若者らしい暮らしをしている。

もし、たけしそのまま郊外で生活していたら、私たちは、ご近所に迷惑がかからないように、家に引きこもるしかなかったかもしれない。彼の自由闊達な生活スタイルは、いわゆる閑静な住宅地には決定的に合わなかった。また常に家族で何とかしなければいけない環境も私たちにはしんどかった。

今、たけしは、厳格にルールが守れなくても、音や振る舞いに多少逸脱するところがあっても、街で生き生きと生活している。それは、街が持つ多様性や、寛容性に助けられているからだと思う。

レッツは2018年にたけし文化センター連尺町を、中心市街地に建設した。

毎日30名ほどの重度の知的障害のある人が活動する、障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」がある。アルス・ノヴァには、一般的な障害福祉施設で行われている作業がない。ここは自分の好きなことをやる場所だ。1日音楽を聴いている人、寝ている人、走り回っている人、

ゲームをやっている人などさまざま。そしてなるべく街に出かけ、街に関わりをつくるようにしている。同時にここは、文化センターとしての機能もある。月に1回行われている「玄関ライブ」、哲学カフェの「ミドのヴぁ」、「かたりのヴぁ」や、定期的に誰でも参加できる本格的なクラブイベントを開催したり、「のヴぁてれび」というYouTubeチャンネルでアルス・ノヴァの日々を発信している。

どこの地域にも、障害者、高齢者、子どもなどの福祉施設は必ず1つはある。しかし、その施設でサービスを受けることができる人は限定されている。しかし、福祉施設がサービス対象者以外の人たちの「居場所」になれば、地域の社会資源は一気に増え、様々な社会課題（引きこもり、孤立、格差、断絶、コミュニティなど）の解決につながっていく。レッツではこれを「福祉施設の社会資源化」として、2010年から取り組んでいる。そして、「たけし文化センター連尺町」は、障害福祉施設であるとともに街の文化創造発信拠点を目指している。

一方で、重度の知的障害者の施設のそのほとんどが、人があまり住んでいない郊外にある。私が、たけしを通して障害福祉の世界に入った時に、まず違和感を感じたのはこの環境だった。施設の建物はどこも立派ではあるが、そこには障害者と支援者しかいない。恋をしたり、友達になったり、人と出会って刺激を受けたり、私たちが当たり前と思う出来事もなく、彼らは人里離れた場所で、多様な人たちと交流する機会も、だれにも自分のことを知ってもらえる機会もなく、一生を終えるのだろうか。

「たけし文化センター連尺町」は浜松駅から800mの街のど真ん中にある。ここに最も重い知的障害のある人たちが活動し生活する拠点をつくった。人口80万人の浜松の街は人が少なくなったとはいえ、郊外や、私の住んでいる地域よりも確実に人に出会う機会がある。そして、彼らにとって街は、交通の便もよく、様々な経験と出会いの機会が多くあり、とても暮らしやすいのである。

「まちづくり」は今まで、道路をつくったり、建物を建てたりと、コトやモノの整備が優先されてきた。しかし建物をつくっても、道路を整備しても、イベントを行っても、結局にぎわいを作り出すことはできなかった。そしてコロナ禍はそんな街の、弱点をさらに顕在化させた。

ネイバーフッドシティという考え方がある。徒歩15分圏内に「私」が幸せに生きるためのセーフティネットがあることを指すのだが、そこで重要となるのは、モノやコトではなく、結局、人なのではないかと思う。

「寂しい時に一緒にご飯を食べてくれる人」「声をかけてくれる人」「困った時に助けてくれる人」、そんな人が15分圏内にいたら人は結構幸せに生きることができる。そしてそれぞれの徒歩15分圏内が重なり合って街が出来上がったら、どんな姿になるだろうか。

福祉が、人が人をケアし、幸せに、健やかに生きるためにあるとするのなら、今、福祉を実現する場として「街」を考えてみたい。そして「ふくし=まちづくり」といった価値観を作り出せたならば、それは福祉の可能性を広げ、街のあり方をダイナミックに変えていくのかもしれない。

2022年にも引き続き「オン・ライン・クロスロード」を実施した。地域の総勢200名の方々に協力いただいて行った大規模イベントは4日間で12,000人が来場した。私たちがやりたかったことは産業振興ではない。コロナ禍の時代の中、広大な空き地に誰もが遊べる遊び場をつくった。こんな使い方もあるということを示したかったし、街は産業だけではないことを示したかった。そしてもちろん重度知的障害者の人たちもそこで遊んだ。

## < 2022年

### 「まちづくりを考えたら福祉にたどりついた vol.2」タブロイド版より>

浜松から始めるウェルビーイング～福祉のネイバーフッドシティ

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツを設立しようと思った動機は、障害のある人もない人もともに生きる社会の実現を希求したからである。あれから23年。4年前に浜松市の中心市街地に障害福祉施設を併設した「たけし文化センター連尺町」をオープン。重度知的障害者がまちを闊歩し活動する場所と、障害者とそうでない人がともにシェアしながら暮らすシェアハウスが多くの皆さんの支援で運営されている。ここに3人の重度知的障害者が暮らしている。そしてコロナ禍。その渦中に「ちまた会議」が発足し、アートによる街応援の意味も込めて「オン・ライン・クロスロード」を実施した。

大きく潮目が変わったと思うのはコロナ禍である。2021年に発足したちまた会議は「福祉を軸にしたネイバーフッドシティ構想」を提唱した。徒歩15分圏内に困った時に頼れる、相談できる、一緒に食事ができる「隣人」がいれば、結構幸せに生きていける。そうしたことを街で

実現しようと呼びかけた。

街はだれにとっても使いやすく通いやすい。そうした街に多様なセーフティーネットとコミュニティをつくり出そうといったこの提言は、我々にとっては至極まっとうな提言ではあるが、しかし、商業中心の街に経済よりも、よりよく生きる福祉（ウェルビーイング）を優先させよというのである。当然反対が多いかと予想していた。ところが多くの企業や団体が耳を傾けてくれた。特に若い経営者やビジネスマンやクリエイターが賛同してくれた。本当に潮目が変わったのだ。

コロナ禍も明けようやく人々が動き出した2023年。しかしコロナ禍前に私たちは戻ることはないだろう。経済が潤っても、人が人として扱われず、脱落していく人を横目で見ながら、助けることもできずにも頑張らなければいけない時代に、人々は戻りたくはないのだ。人が人として尊重され、弱さやダメさも許容しながら、ともに生きる社会をつくっていくことが私（自分）の幸せにつながると多くの人が気づき始めたのだ。

だからと言って人の気持ちは移ろいやすい。グローバル化も少子化も社会の歯車はそう簡単に止めることはできない。だからこそ地方から始めようではないか。スカスカで余白があり、でもそれほどダメでもない浜松の中心市街地から、本物のウェルビーイングが始まったら、それこそ社会は変わると思う。障害者も高齢者も子供も若者も生き生きと生きていける、活動できる街に。そしてそれが私たちが長年希求してきた「多様な人がともに生きる社会」の礎になる！と確信している。

## ちまた公民館

2022年に中心市街地に2つ目の拠点づくりが始まった。そしてちまた公民館がオープンする。

## < 2022年

### 「まちづくりを考えたら、福祉にたどりついた vol.2」タブロイド版より>

「私」を開き、「公共」をつくる  
(文：原菜月)

街の人たちにも「表現未満、」がある

たけし文化センター連尺町から徒歩10分弱、多くの車が行き交う浜松市紺屋町の交差点に、「ちまた公民館」がオープンした。街の人が自由に使える、いわゆるフリースペースだ。

ここで1日過ごしていると、いろいろな人が、いろいろな遊びを持ち込んでくる。手芸する人、詩を書く人、仕事の作業をする人。毎日、ちまた公民館の外に置かれたガチャガチャを引いていく人や、周りの人に突飛な質問をぶつける人もいた。性格や属性が全然違う人たちが、同じ空間でそれぞれ好きなことをしている。私はというと、その様子をただぼんやり観察していた。その時間が妙に楽しく、心が安らいだ。

一見、たわいもない活動に思えるかもしれない。でもこれらの活動は、街の人たちの「表現未満、」なのだと思う。好きでたまらないこと、やらないと気持ちが落ち着かないこと。何かの役に立つわけではなくても、その人そのものを表す、大切な行為だ。もちろん、創作活動に限らず、おしゃべりやぼんやり過ごすことも含まれる。

そう、たけし文化センターの核が重度障害者の熱意だとすれば、ちまた公民館の核は、街の人の熱意なのだ。そして街には、この熱意の受け皿があまりにも少ない。カフェやレストランは飲食、店舗は買い物、図書館は読書や調べもの、ほとんどの場所で「目的」が決められている。公民館などの公共施設でさえ、目的を掲げなければ使用許可が下りない。逸脱しないように、浮かないようにと、細心の注意が求められる。

一方で、ちまた公民館は「無目的」であることを徹底している。無目的を掲げることで、行き場のない「好き」や「やりたい」を持ち込める受け皿になっている。こういう場所がレアだからこそ、ちまた公民館にはひっきりなしに人がやってくるのだろう。

一人でできることを、あえてシェアしてみる

でも、人はなぜ家から出て、わざわざちまた公民館へやってくるのだろう。スタッフの幸田穂奈美さんは「家で一人でもできる遊びを、あえて他者がいる場所でやるのが面白いんだと思います」と分析する。

たしかに、個人のやりたいことを排除しないちまた公民館のような場所は、大きなケアをもたらしてくれる。遊びでも、おしゃべりでも、昼寝でも、自分の表現がまるごと受け止められたと実感できた時、私たちの孤独感は少しだけ解消される。個人が好きなことをやる場所だから、

固定された役割もない。コロナ禍を経た今、ここへたくさんの人がやってくるのも、きっとそういうことだろう。「個人の幸せを追求」することが福祉だとすれば、ここは貴重な福祉の拠点だ。

そしてもうひとつ、ちまた公民館では、ゆるやかなコミュニティができつつある。例えば、レッツのスタッフ内田翔太郎さんが作った「ガンブラ部」。最初は、ちまた公民館で一人、または少人数で、ガンブラを組み立てたり、談義したりする。すると関心を持った人、共鳴する人、さらに発展させる人たちが出てくる。この関わりを通じて、紺屋町の交差点ですれ違っていただけのAさんは、いつしか「ガンブラ部のAさん」に変わるのだ。プライベート（私）な遊びを共有し、少しずつパブリック（公共）に開いていく。その積み重ねで、現にちまた公民館を中心にコミュニティができつつある。この工程は、まさに街づくりそのものなんじゃないか。裏を返せば、本来、街づくりは「個人の幸せ」、つまり福祉を起点にする以外、実現する方法はないのかもしれない。

街づくりの大きな文脈から取りこぼされてきた人たちが、「私」を開き、自らの手で「公共」をつくっていく。ちまた公民館は、それが街中でできるのだと実証している。

## そして原点回帰

2023年は原点回帰の年となった。2022年に行った「オン・ライン・クロスロード」はレッツ史上最大の集客となったが、これはコロナ禍で今こそアートができることを示すイベントでありそれ以上でもそれ以下でもない。つまり障害福祉施設を運営するレッツがこうした大規模イベントを行うことができるといった表明にはなったものの、私たちが本当に求めているものではない。「福祉のネイバーフッドシティ構想」に象徴されるように、多様な人の多様な居場所をつくり出していくことと、血縁でもない、地縁でもない文化・芸術による（「表現未満、」を核としながらつながる）コミュニティづくりだ。その原点に立ち戻って2023年は活動を開始した。

まず「ちまた公民館」を恒久的に継続していく方法を検討した。そのためにちまた公民館の中に「地域活動支援センター」を内包できないかといった試行錯誤が始まった。また「出張ちまた公民館」として近隣の公共施設や公民館（浜松市は協働センターと言う）に出張する事業を行った。これは既存の公共施設や公民館のあり様を拡張することに成功した。

つまり「公共施設はそもそも多様な人の受け皿であり、文化活動を通してコミュニティを作り上げていくときのハブである」といったことを改めて呼び覚ます事業となった。

さらに地域住民と仲良くなるための仕掛けとして、みんなでつくる祭りを考案した。2023年はまさに原点回帰。そして地域の人たちと作り上げる文化によるコミュニティづくりの0年の年と位置付けた。

そしてその拠点を無数に街に作っていくことにも注力している。まずは自分たちが場をつくっていくことでその重要性和ノウハウを蓄積している。そして今年度7本の事業を行った。「表現未満、」をコンセプトに「表現未満、」的な要素や会社をベースとした事業を展開している。

## 認定NPO 法人クリエイティブサポートレッツ

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがいを乗り越えて人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つめていく場を提供し、様々な表現活動を実現するための事業を行い、全ての人々が互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりを行う。

特に、知的に障がいのある人が「自分を表現する力」を身につけ、文化的に豊かな人生を送ることの出来る、社会的自立と、その一員として参加できる社会の実現を目指す。

そして、知的に障がいのある人も、いきいきと生きていけるまちづくりを行っていく。

### 事業概要

#### たけし文化センター連尺町

重度の知的障害者を核としながら、様々な人たちが集い・学び・交流する文化センター。

#### ちまた公民館

誰もが利用できる私設私営の公民館。  
人々が出会って集うことで生まれる街の可能性を実験する場所。

#### 障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ

大人から子どもまで、様々なメンバーが利用する障害福祉施設。  
連尺町と入野町の2拠点で活動中。

#### ヘルパー事業所 アルス・ノヴァ ULTRA

重度知的障害者の「文化的で自立した暮らし」の実現を目指し、生活のアシスト活動を行っている。

### お問い合わせ

電話 **053-451-1355** (たけし文化センター連尺町)

メール **lets-arsnova@nifty.com**



ウェブサイト

<https://cslets.net/>



Google マップ

<https://maps.app.goo.gl/qdc1Xk1GBuNoxXsf9>



Instagram

<https://www.instagram.com/letsarsnova/>



Facebook

<https://www.facebook.com/takebunn/>



X(Twitter)

<https://twitter.com/cslets>



YouTube

<https://www.youtube.com/@NovaTVlets>

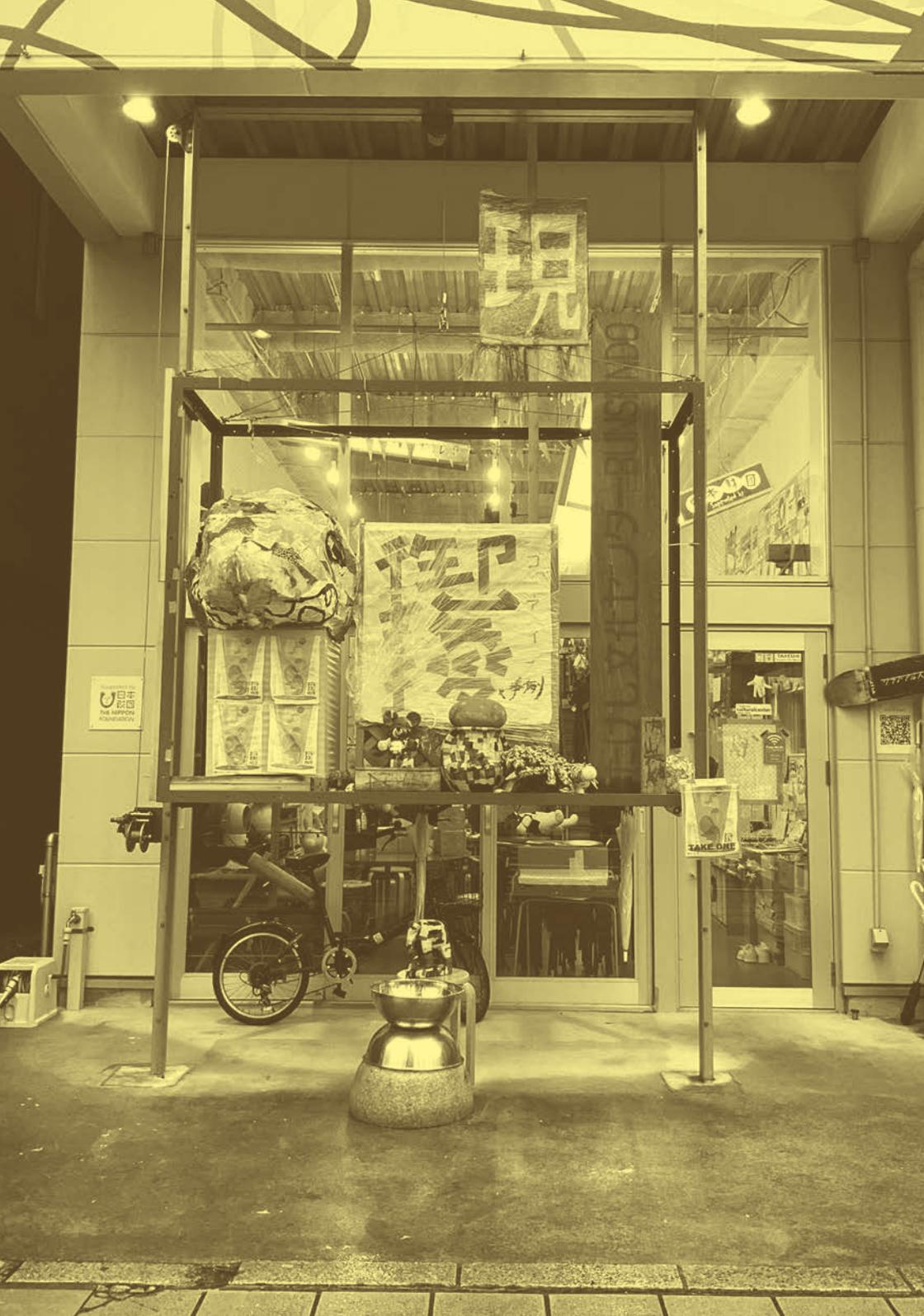
文化庁委託事業  
「令和5年度障害者等による  
文化芸術活動推進事業」

発行日  
2024年3月31日

発行元  
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ  
静岡県浜松市中央区連尺町314-30

デザイン  
BOB.des' (ウエダトモミ)

印刷  
東海電子印刷株式会社



日本  
の  
お  
も  
て  
な  
し

御座  
争阿

TAKE ONE